

二〇二五年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二五年 二月二日実施

国語

二日午後二科

- 一、問題に答える時間は五十分です。
- 二、問題は、問題一 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

ある落語家が、新聞におよそ次のようなことを書いていました。

落語というものは、聞いてくださる方たちの想像力が頼りなのです。

ですから、その想像力にうまく訴えなければ、先へ進むことができません。

なかには、想像力が不足している方もいらっしやいまして、^①できるだけ所作で刺激したり、扇子などを使ったりするわけです。

噺家は、顔の向きを左右にうごかしたり、表情や声をかえたり、扇子を使ったり、要するにいろいろとジェスチャーをまじえながら、観客の「想像力」に訴えかけながら、語ります。

それで思い出すのは、古典落語「井戸の茶碗」。

江戸時代の正直一徹の*くずやのはなし。

「井戸の茶碗」というのは、朝鮮の美麗茶碗で、雑な茶碗でした。ところが日本では、茶人にこのまれ、珍重されるようになり、名器とされるものが出現しました。

江戸時代、麻布の茗荷谷にくずやの清兵衛さんとよばれる人がいました。たいへんな正直者で、まがったことが大嫌い。

まがったものを見るだけで、腹がたつ。路地をまがるのも、ほんとはまがりたくない。けれども、路地に入らないと商いが成り立たない。

まわりから、正直清兵衛とアダナされていました。毎日、朝早くから一日いっぱい働く人でした。

ある日、(現在の東京港区にある)清正公様のわきで呼び止められて、くずを買う。そのおり、ついでに仏像をぜひ買ってくれと^aせがまれる。今は*浪人の元武士らしいその男から、生活にこまっても二百*文いるといわれる。くずも

の以外は買ったことがないくずやは、その仏像を預かることにする。

「じゃあ、こういたしましょう。この仏像をね、二百文で預かりましょう。それより高う売れたら、その半分をこちらにお届けにあがります」

そうして、細川屋敷のおもて長屋にくと、二階の窓から呼び止める者がいる。

（長屋と聞いて想像できませんか。江戸時代の集合住宅。アパートです。）

「その方のかついでおる籠のなかに、なにやら仏像のようなものがはいつておるが、それはなんだ」

「へえ、仏像でございます」

「おお、なんでできておるのだ。じつは、仏壇をこしらえたが、仏像がない。もし氣にいれば、それを買いたい」ということになり、三百文で売買が成立。

買った武士は、そのすすけた仏像を、塩で清めて、ぬるま湯であらう。すると、お腹から小判がでてきた。ぜんぶで五十両。

「拙者はこの仏像を買ったが、なかの小判は買ったおぼえがない。仏像を売り払うくらいだ、持ち主はさぞかし暮らさむきもよくないであろう。もとの持ち主にかえしてやりたいが、さて、どうしたものか」

そこで、例のくずやが窓下を通るのを、待つことに。

何日かたって、ついにそのくずやがあらわれる。

くずやは、細川の家臣・高木佐久左衛門と名乗る武士から、五十両をあずかり、浪人のところへ届けに行く。

「あ、いやいや、そのようなことをせんでもよい。そちらにしまっておきなさい」

「いいえ、あたくしの気がすみませんから、どうぞこれはおさめてくださいまし」

⑥ 押し問答のすえ、浪人はすべてを受け取り、感謝のしるしに、茶碗を武士にプレゼント。

その茶碗がまわりまわって、殿様のお目にかない、専門の鑑定家の鑑定の結果、「井戸の茶碗」という名器と判明。殿様に三百両で買い上げられることになります。

その半分の一五〇両が浪人の元にとけられ、浪人はその金を受け取るかわりに、娘を武士に*娶ってもらうことに。浪人は娘の嫁入りのしたく金として一五〇両を使い、その武士の元に娘をとつがせる。

② 万事めでたし、めでたし。

③ この落語の最後の*オチは、くずやと武士の会話になっています。どちらがくずやで、どちらが武士か、想像してみてください。

「そうなさいよ。けっこうなことですよ。そりゃあ今はね、長屋にいますから、ちよいとくすぶってますがね。こちらにつれてきて、みがいてごらんなさい、いい女になりますよ」

「いやあ、みがくのはよそう。また小判が出るといけない」

「井戸の茶碗」のあらすじを急いでたどりましたが、これでは、名作の味がわずしか伝わりません。*志ん生か志ん朝の名演をぜひお聴きください。

ぼくがここに紹介した意図は、登場したくずや、浪人、武士たちの人間らしさ、その人情の機微の美しさが、「④ 相手を思いやる豊かな想像力」に支えられていることを、わかっていただきたい点にあります。

人間が動物とちがう点。相手を思いやる心、胸打つ人間らしさが奈辺(どこ)にあるか、それをしかと捉えてほしいと願うからです。

自分がこんなことをされたらどんな感じがするか。立場を逆にして、相手の立ち位置にたつて、想像してみるこの大切さ。宮本武蔵がしたように、「いったん立ち止まって、相手の立場から自分を見つめる」。そして想像力をフル回転させる。反対に、人間らしい想像力が貧しいと、どういうことになるでしょうか。

人のものを盗る、人をいじめる、だます、殴る、殺す……、これはもう、人間のすることではありませんね。

さて、想像するということは、なにも落語を聴く時とはかぎりません。まんが、童話、小説を読む時、テレビドラマ、映画を見る時、「想い描く力」が足りない、ストーリーをたどることができなくなります。

日常生活においても、想像力が欠けていると、おもわぬことが発生します。

たとえば、ここにくずかごがあります。紙くずを捨てる分には問題ありませんが、ケーキとかクリームで汚れた紙を捨てたします。籠がいっぱいになってゴミに出すまでに一か月もあつたら、くずかごにアリが来るかもしれせん。ゴキブリ

がひそむかもしれません。それを想像できる人は、べとべと汚れた紙を、そのまま捨てるようなことはしませんね。アリやゴキブリがたかるのを想像できるかできないかは、算数や数学の問題が解けることとは、関係ありません。苦労は金を出してでもするものだ、といいます。

「なんでも見てやろう」と、^⑤ 外国までひとり旅に出た人がいました。

人間を観察して、人生とは何かを、自分の目で確かめてみようというわけです。経験が豊かであれば、想像力はそれだけ豊かになります。ですから、みなさんも広い社会に出て、たくさんを経験をつんでください。

人間らしさの代表格である「やさしさ」「思いやり」「隣人愛」といわれるものは、考えてみれば、みんな想像力の賜物^{たまもの}といえるでしょう。

異国の人がなれないバスに乗っていて、降りるべきバス停にいつ着くかわからず、キョロキョロと窓外を見やっている時、その外国人に、

「何か、お困りのことがありますか」

と尋ねるのは、Xと想像することから生まれるのです。人間らしい想像力が、そういう言葉をかけさせるのです。それが人としての自然な振舞いではないでしょうか。

このように見てくると、考える際にものをいうのは、「豊かな想像力」、いうなれば「全人的な想像力」ではないか、と考えられます。

想像力が豊かであればあるほど、人の悲しみがわかり、思いやる心が育つのではないのでしょうか。

数学者の岡潔^{おかきよし}は、「情緒^{ちよ}」がいちばん大事だといっていました。

「人にとって大切なのは知・情・意と感覚で、それらは液体のようなもので混ざりあっている。それをわたしは情緒とよんでいる」

「情緒を大事にすれば、人の悲しみがわかるようになり、慈悲^じの心が育ち、優しくなれるし、恥^はじらいの感覚がやしなわ

れる」

「恥じらい、羞恥心しゆうちがなくなれば、人は人でなくなる」

聖路加国際病院の院長・日野原重明はキリスト者にふさわしく「人を赦ゆるすこと」を第一にあげていました。そして「世の光となる」こと。

モンテニユは「寛容かんの精神」を強調しました。

みんな豊かな想像力の賜物です。

(小島 俊明としはる『ひとりで、考える——哲学する習慣を』 岩波ジュニア新書)

〈注〉くずや……紙くず・ぼろ・古綿などの廃品はいを売買する商売をする人。

文……昔の通貨の単位。

浪人……主君を離はなれて禄ろく(給与)を失った武士のこと。

娶むかる……妻として迎えること。

オチ……人を笑わせるような結末。

志ん生か志ん朝……「志ん生」と「志ん朝」は、ともに名人と言われている落語家。

問一 〓線部①「せがまれる」・②「押し問答」の文中での意味として最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① せがまれる

- ア 判断を迫られる
- イ 責められる
- ウ 無理に頼まれる
- エ 提案される
- オ とつちめられる

② 押し問答

- ア 対立する双方が譲り合って一致点を見いだすこと
- イ 互いの主張がすれ違い、打開策がないこと
- ウ 互いの意見が対立し、話し合っても意味がないこと
- エ 質問を想定し、それに対する模範回答を用意すること
- オ 互いに自分の立場を主張して、あとにひかず言い争うこと

問二 〓線部①「できるだけ所作で刺激したり、扇子などを使ったりする」とありますが、噺家は落語を演じる時にどうしてこのようなことをするのですか、答えなさい。

問三 〓線部②「万事めでたし、めでたし」とありますが、落語「井戸の茶碗」において、めでたい結果に含まれるものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア くずやが、くずではない「仏像」や「茶碗」を商うことが出来て、その結果、少くない金を得ることができたこと。
- イ 高木佐久左衛門が、「井戸の茶碗」を殿様に買い上げてもらった縁で気に入られ、美しい娘も娶ることができたこと。
- ウ 殿様が、以前から欲しかった「井戸の茶碗」を、清兵衛が機転を利かせたおかげで手に入れることができたこと。
- エ 正直者が貧しい浪人が、もうう理由のない金を手にすることなく、娘を武士にとつがせることができたこと。
- オ 浪人の娘が、殿様のお目にかない、父のかねてからの願い通りに、高木佐久左衛門の嫁になれたこと。

問四 — 線部③「この落語の最後のオチ」とありますが、落語「井戸の茶碗」の最後の会話のどのようなところが人を笑わせるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 長屋でくすぶっている浪人の娘をすすけた仏像に見立て、みがくように言ったくすやに対して、仏像の時のように娘からでるはずのない小判が出るといけないと武士が応じたところ。

イ 嫁入りのしたく金を一五〇両もかけた娘を自分が娶っていいものかと迷っている武士に対して、くすやが五十両の小判の出た仏像をたとえに出して、みがくようにそのかしているところ。

ウ 長屋暮らしがすっかり身についてしまった娘だが、きつといい女になると見抜いて武士に娶るよう促すくすやに対して、仏像よりも高くつくから嫁にするのをあきらめようと武士が応えているところ。

エ 今でこそ落ちぶれているが良い嫁になると信じて浪人の娘を自慢するくすやに対して、武士が娘から小判が出るといけないと冗談を言って嫁入りをそれとなく断っているところ。

オ 武士の嫁として恥ずかしくない女になるようみがくのすすめる武士に対して、一五〇両の支度金が無駄になるのを心配し「みがくのはよそう」とくすやが応えたところ。

問五 — 線部④「相手を思いやる豊かな想像力」について、次のⅠ、Ⅱの問に答えなさい。

Ⅰ 「武士」から「浪人」に対して、「相手を思いやる豊かな想像力」が読み取れる会話の一部を五十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

Ⅱ 「相手を思いやる豊かな想像力」はどのようにすることで養われますか、——線部④より後の文章を参考にして説明しなさい。

問六 ――線部⑤「外国までひとり旅に出た人がいました」とありますが、筆者はなぜこのような例を挙げたのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 外国でのひとり旅で苦しい経験をするのが、人を思いやる心を育むと考えたから。

イ 外国でのひとり旅を通して得た経験が、その人の想像力を豊かにすると考えたから。

ウ 外国を一人で旅した経験が、人生とは何かという哲学的な問いに答えを与えてくれると考えたから。

エ 外国を一人で旅することができたという自信が、広い社会へ一歩を踏み出す勇気を生むと考えたから。

オ 外国でのひとり旅を通して人間を観察することが、後の人生に有用であると考えたから。

問七 文中の X に入るのに最も適当な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア その外国人に日本語が通じていなさそうだ

イ その外国人はどこから乗ってきたのだろう

ウ その外国人が困っていそうだ

エ その外国人の目的地はどこだろう

オ その外国人と仲良くなれそうだ

問八 文章全体を通して、筆者の言いたいこととして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 人間が動物と異なり人に優しくなることができるのは、しぐさだけでなく言葉によって情報を伝達し意思を伝え合うコミュニケーション能力があるからである。

イ 人に想い描く力が十分備わっていないと、落語や小説のストーリーを追うことができなくなるだけでなく、日常生活においても他人に迷惑わづをかけてしまうことがある。

ウ テレビドラマや映画において、登場人物の心の微妙な動きを感じることができるかどうかは、それを観る人の人生経験の深さによるのである。

エ 人に恥じらいの感覚が生まれるのは、知・情・意と感覚が混ざりあつて人の悲しみがわかることで、慈悲の心を持てるようになるからである。

オ 人間が動物と違うと言えるのは、豊かな想像力を持つことができるからであり、それによって人の悲しみを自分のものとして感じたり、人を思いやることができるのである。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

父と母と娘の「すみれ」、そして犬の「ラブ」の、三人と一匹で暮らしている東京の家に、長野で一人暮らしをしている「おじいちゃま」が仕事の関係で一ヶ月ほど同居することになった。「おじいちゃま」は雨の中、ズボンの裾も濡らさず、ぴかぴかに磨かれたくつを履き、髭をきれいに整えた姿で家族の前に現れた。

おじいちゃまが家にいるのは、おかしい感じだった。

血の繋がった人なのに、他人がいるような気持ちがすることが申し訳なかった。でも、歯を磨いているおじいちゃまと洗面所で鉢合わせをすると「ひっ」と声を出してしまったし、ものすごく豪華な食卓をみんなで囲んでいるとき、どうしても作り笑いをしてしまった。私だけじゃない。パパもラブもなんだかぎくしゃくしていて、元気なのはママだけだった。

「お父様がくれたピアノすみれ弾いてるのよほらすみれ何か弾いてさしあげなさい！」

「あなたブロッコリー好きでしょお父様も好きなのよこれ無農薬野菜しか売っていない店で買ったの安心よ！」

私はピアノでソナチネを弾いたし、パパはブロッコリーを六つも食べたし、ラブは大人しく、いい子にしていた（スリッパを三個もだめにしたけれど）。

① 自分の家なのに、なんだかぐつたりした。私がほっとするのは夜眠るときだけだった。みんなに丁寧なおやすみなさいを言っ自分の部屋に入ると、「ああ」と声が出るほど力が抜けた。ベッドに入っているときには、まぶたの裏に「あと何日」と数字が出た。そんなこと思っちゃいけない、おじいちゃまは私の大切な人だから、そう思えば思うほど、数字は濃くなった。② 私は、孫として冷たい、悪い子だった。

おじいちゃまはでも、そんな私の本音になんて、まったく気づいていないようだった。ママが作る料理をにこにこしながら食べ、時々感嘆の声をあげ、ラブを優しく撫でて、食後はお茶を飲みながらパパと話をした。私におこづかいをくれたし、素敵な本をプレゼントしてくれたし、時々お土産に美味しそうなケーキを買ってきてくれた。家でも綺麗な洋服を着て

(シャツには絶対に皺しわがなかったし、いつもほとんど新品の靴下くつをはいていた)、スリッパの音を立てずに歩くことが出来た。お風呂に白髪しろがみが浮ういていることなんてなかったし、おならをするなんてもつての外ほかだった。おじいちゃまはいつも完璧ぺきなのだ。

「お父様は、ずっとそうだったわね。本当に、本当に素敵なお父様で、私はいつも幸せだったわ!」

お夕飯の席で、ママはそんなことを恥はずかしがらずに言った(ほんとに叫さけんだ)。

ママは素直すなおな人だった。十二歳さいの私から見ても、信じられないほど素直な、まっすぐな人だった。運動会に来たら入場の段階で泣いているし、ピアノの発表会では演奏後立ち上がって拍手はくをする(時々びゅーっと口笛くふを吹くときもある)。困った人がいればすぐに助けるし、間違ちがったことにははつきり間違まちがってるって言うし、自分の家の範囲はんを大いに超こえて綺麗に街の掃除そうじをするので、近所の人もママには感謝かんしゃしている。

…… 中略 ……

うちの家では、私だけがなんだかひねくれ者なのだ。

冷めているというわけではないけれど、パパとママみたいになんでも素直に感情を表現出来なかった。正直運動会ってなんだよと思っているし、ピアノの発表会もプロになるわけじゃないのになあと思っている。同級生は嫌いじゃないけど結構な頻度ひんでガキっぽいと感じるし、放課後までいちゃいちゃしたがるのはしんどい。いつも何かを観察さつしているようなところがあつて、だから先生や大人の前でもうまくふるまえる。そのくせ「すみれちゃんは本当にいい子ね」なんて言ってくれる大人をどこかで馬鹿ばかにしているのだから、タチが悪い。タチが悪い、なんて、そんな風に思いたくないけれど、でも最近どうしても自分のことをすごく嫌いになる。汚きたない、ずるい人間だつて。

おじいちゃまのこともそう。口では「おじいちゃまが来てくれて嬉しい」なんて言っておいて、部屋であんなにほつとするなんて卑怯ひきょうだ、いやらしい、冷たい。愛想笑せうせういはお手のものだし、行儀ぎよくするのなんて私わたしは憂鬱ゆううつだった。カレンダーを見たらおじいちゃまがいる日数はまだ半分も経へっていないかった。ため息が出た。

…… 中略 ……

家に帰ると、鍵かぎがかかっていた。ポストの中に張り付けてある鍵を取って中に入ると、しんとしていた。居間に行くと、テーブルの上にママの置き手紙がある。

「おとうさまは散歩に。ママは買い物に行つてきます。ピアノの練習忘れずにね。」
やった、と声が出た。家にひとりだ！

私はランドセルを投げ出して、ソファにどしーんと横になった。思い立つて台所に行つて、プリンやかりんとうを出した。手あたり次第食べながらつまらないテレビを見て、③私は自由をしみじみと感じた。

「ひとりになりたいなあ。」

思わず独り言を言つた。ひとりになりたい、そんなこと思つちゃいけない。でも、心底ひとりになりたかつた。ママもパパも大好きだけど、私のことを誰も知らない場所ですらひとりで暮らしたかつた。さくらちゃんも学校の先生もいない場所です。たつたひとりで。それつて、どれほど楽なことだろう。

「ひとりになりたいなあ。」

もう一度言つたとき、ガタツと音がした。息を飲んで飛び起きると、音がしたのはどうやらおじいちゃまの部屋だつた。体が冷たくなつた。おじいちゃまがいるのだろうか。散歩に行つたのじゃなかつたの？

「お、じいちゃま？」

声をかけると、ふすまがそろそろと開いた。体が冷たいのに、嫌な汗あせが出た。おじいちゃまを傷つけてしまつた！ 今この状態で「ひとりになりたい」なんて、おじいちゃまのことを邪魔じゃまだと言つてゐるようなものではないか！

「すみれさん。」

でも、おじいちゃまは、私の予想と全然違う顔をしていた。悲しそうでもなく、バツが悪そうでもなく、それどころか、なんだかほつとしてゐるみたいに見えた。

「私のです。」

おじいちゃまと長く話したのは、それが初めてのことだつた。

おじいちゃまは私の隣となりに座り、かりんとうをつまんだ。いつも通り綺麗なお洋服を着ていたけれど、スリッパをはいていない足に五本指の古びた靴下をはいていて、それだけで随分ずいだらしく見えた。

「しんどいですよね、正直。」

おじいちゃまは、私に負けない大きなため息をついた。

「娘だし色々氣遣^{づか}ってくれるのは嬉しいんですけど、こうもまっすぐ愛情をぶつつけられたら、すごく疲^{つか}れるんですよ。私もひとりになりたい。早く長野の家に帰りたいです。」

「そうなの？」

「だってそうでしょう。ここにいると完全なひとりの時間がないし、すみれさんだって気を遣^{づか}うでしょう。」

「気……そんな、こと。嬉しいよ、おじいちゃまがいてくれて……。」

「いいえ、いいえ、いいんです、無理しなくて。気持ち分かりますから。すみれさんは、私たちにすごく似ている。」

「私たち？」

「私と、あなたのおばあさんです。」

「おばあちゃま？」

おじいちゃまの話は驚^{おどろ}くべきことだった。みんなに好かれて優しい、上品なあのおばあちゃまは、おじいちゃまとふたりのときは、毒^{どく}b家で、ひどい悪態をついて、時々仲良しの友達の悪口だって言っていたのだそうだ！ そんなこと、信じられなかった。

「おばあちゃまが？ 信じられない。」

そんなことを言いながら、私はなんだかワクワクしていた。おじいちゃまを見ると、おじいちゃまも、なんだか嬉しそうだった。

「すみれさんも、いい子でいようと思ってるでしょう。でも、疲れますよね。私もそう。娘にすら疲れるんです。あの子には、私たちの良いところしか見せて来なかったから、それはそれは心根の優しい、いい子に育ってしまった。だからあんな風に愛情を隠^{かく}さない。まっすぐでしょう。それがねえ、ちよつとしんどいですよねえ。」

私は思わず、吹きだしてしまった。

「しんどいつて、おじいちゃま、ママは実の娘でしょ？ 娘ってかわいいものなんじゃないの？」

「これは正直に言いますとね、娘だからって無条件にかわいいなんてことないですよ。」

「ええ！」

「みんなどうしてあんなに自然に、自動的に家族の愛を信じられるんだろう。ばあさんも言っていました、子どもが生まれたらただちに母性が発動するわけじゃないって。みんなそういうものだから、という押しつけがあるからそうふるまっているだけです。正直ね、私、すみれさんのことも、孫だからって自動的にかわいいと思えないんですよ、申し訳ないですけどね。」

その頃には私は、本格的に爆笑していた。

「孫なんて、目の中に入れても痛くないんじゃないの？」

「痛いでしょうよ、入れたくないですよ！」

おじいちゃまのことは好きだった、はずだ。でも、④今のおじいちゃまの方が、私はうんと好きだった。そしてきつと、このおじいちゃまの姿をママに見せてはいけないのだということも分かっていた。だからおじいちゃまと私は、協定を取り結んだ。

⑤係だと思ひましょう。」

「係？」

「そうです。すみれさんは、孫係。わたしは爺係。この一ヶ月、それぞれ、係をきちんとつとめあげませんか。私の娘のために。すみれさんのお父さんのために。」

そのアイデアは、私にとつてもものすごく素敵なことに思えた。私たちふたりは、悪い秘密を共有したギャングみたいなものだった。

「係だと思ったら、なんだって出来るんです。」

その日から二人は「係」の任務を完璧にこなした。そしてそれはママとパパを喜ばせ、「私」自身もとても楽になった。

そしてそうやっていても、帰ったらおじいちゃまの前で悪態がつけると思ったら、ものすごくわくわくするのだった。最初はそれって最悪、ものすごく性格悪いよな私、そう思っていたのだけど、おじいちゃまと話して、そう思わずにすむようになったのだ。

「人はそれを陰口かげくちだとか卑怯ひけつだとか言うかもしれない。性格が悪いとか。」

「うん、私もそう思う。だから自分のことが嫌になるの。」

「でもね、すみれさん。すみれさんがそうふるまうのは、さくらさんを傷つけたくないからでしょう？ 先生の期待に応えたいからでしょう？」

「うん、そうだね。そう。」

「じゃあそれは思いやりの心からくるんです。」

「思いやり？」

「そうです。それは誰かを騙だましているのとは違う。騙して、それで得をしようとしているのではないのだから。ここが大切です。つまり、得をしようと思って係につくのはいけません。あくまで思いやりの範囲はんいでやるんです。その人が間違っていると思ったら、そしてそれを言うことがその人のためになるのだったら言わなければいけないし、相手を傷つける覚悟覚悟をもって対峙たいししなければいけない。でも、その人が間違っていないとき、ただ性格が合わないだけだとか、その人の役割やくわく的に、そうせざるを得ないんだあと分かるときは、その人の望む自分での努力をするんです。」

「難しいけど、分かる気がするよ。」

「すべて分からなくていい、とにかくすみれさんがいい子でいようとすることは、とてもえらいことなんです。それは涙なみだぐましい努力だし、いい子のふりではなく、本当にいい子だから出来ることなんです。」

「褒められてるんだね、私。」

私は自分のことがずっと嫌だった。みんなの前でいい子のふり（だと思っていた）をして、みんなのことをガキっぽいと思ったり、さくらちゃんのことをうつとうしいなあと思ったり、おじいちゃまが家にいることもしんどいと思ってる、そんな自分は卑怯で、悪い子なんだと思っていた。でもおじいちゃまは、そんな私を「本当にいい子だから」と、そう言ってくれるのだ。

「だってもしすみれさんに、おじいちゃまが家にいるのすごくしんどい、いつ帰るの、なんて面と向かって言われたら、さすがの私も泣いてしまいますよ。根はいい子なんていうのも納得出来ない。みんな根はいい子なんだ。それをどれだけ態度に表せられるかですよ。」

私は吹き出した。おじいちゃまにかかると、私はいつまでだってこうして笑っていられるのだった。

「そういえば私、パパが納豆^{なとう}食べるとこ見たらキモイの。でも言わないでいる。」

「でしよう？ すみれさんはいいい子なんです。正直なことで優しいことは別なんだ。」

パパもママも、こうやって一緒に^{しょ}歩いてるラブだって、まさか私とおじいちゃまが散歩しながらこんな話をしているなんて思わないだろう。もしそれを知ったら悲しむだろうか？ ううん、驚きはするけれど、悲しまない気がする。でも、
⑥ 絶対に言わない。ママのために。

「そしてね、すみれさん。悪態をつくのは限られた人にだけ、本当に信じられる人にだけです。インターネットに書きこむなんてもつての外、それは本当に卑怯なことです。とにかく本人の目に触^ふれる、耳に入る可能性があることは絶対にするべきではない。」

「そうする。私、おじいちゃまだけにする。」

「ばあさんも、私以外には一切悪態をつかなかった。みんなを思いやって、みんなが望むことを全力でやって、そして疲れたら私だけにそつと悪態をつく。絶対に誰にも漏^もらさなかったし、だからそれによつて誰かを傷つけることは絶対になかった。」

「素敵だね、おばあちゃま。」

⑦ 素敵ではないです。素敵ではない。でも私は大好きでした。」

おじいちゃまの言葉を、私は心から信じる事が出来た。ふたりで「素敵な夫婦」として完璧にふるまって、疲れたら悪態をつき合うなんて、最高のパートナーだ。そして、そんなことが出来る人と巡^{めぐ}り合えるなんて奇跡^{きせき}だ。

「おばあちゃまがいなくなつて寂^{さび}しい？」

「寂しいです。すごく、すごく。」

淡々^{たんたん}と暮らしているように見えたおじいちゃまは、ずっと寂しかったのだ。その寂しさを自分のものだけにして、誰にも言わず、こうやって生きてきたのだ。

「寂しいです。」

おじいちゃまは、あと一週間で帰ることになっている。私も寂しかった。ものすごく寂しかった。一カ月前の自分を思う

と、この気持ちが信じられなかった。

「おじいちゃまが悪態つきたくなったら、私に電話してよ。」

「すみれさんに？」

「うんと悪態ついてよ。私がおばあちゃまの代わりになるよ。」

「本当ですか？」

「うん。私だって悪態つく人いなくなるもん。困る。」

「そうか、そうですね。」

「そうだよ。」

ラブがおならをした。私たちが笑うと、ラブも嬉しそうに尻尾を振った。

おじいちゃまが帰る日、ママは涙をぼろぼろ流した。予想出来ていたことだけど、ママのことを、私は大好きだと思った。素直なママ。素直な娘。

「お父様、きつときつと連絡してね。」

でも、ママがおじいちゃまの肩に手を置いたとき、思った。もしかしたら。

ママだって、「お父様のことが大好きな娘」を、きちんとこなしているのかもしれない。

ママがおじいちゃまのことを大好きなのは真実だけど、でも、それ以上に優しい気持ちで、おじいちゃまを愛しているのかもしれない。「母性が自動的に発動」するのではないのだったら、「子どもが親を慕う気持ち」だって、ナチュラルなものとは限らないじゃないか。

「本当にありがとう。」

おじいちゃまは、肩に置かれたママの手の上に、自分の手を重ねた。ふたりの姿は完璧な親子に見えたし、^⑧親子以上に素敵なものに見えた。お互いの役割を、思いやりをもってこなしている、立派な生き物に見えた。

(西) 加奈子「孫係」 『おまじない』 所収 筑摩書房

問一 文中の **a**・**b** に、漢字一字を入れて、それぞれ文の意味に合うような三字の熟語を完成させなさい。

問二 — 線①「自分の家なのに、なんだかぐったりした」とありますが、なぜ「ぐったり」してしまったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「おじいちゃま」のためのものすごく豪華な食卓にも飽きてしまったから。

イ 完璧すぎる「おじいちゃま」と自分を比べてしまい、ねたましく思ってしまったから。

ウ 「おじいちゃま」のせいで家族みんながぎくしゃくしてしまったから。

エ 家にいるのが自分の「おじいちゃま」なのに、他人がいるようで落ち着かなかったから。

オ 「おじいちゃま」がいると家族全員が必要以上に張り切ってしまうから。

問三 — 線②「私は孫としては冷たい、悪い子だった」とありますが、どうしてそう思うのですか。説明しなさい。

問四 — 線③「私は自由をしみじみと感じた」とありますが、「私」の考える自由とはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア やりたいことをやりたいようにやっても、誰からも叱られないことが分かっていること。

イ 誰の目も気にする必要がないところで、何も気にせず自分の思い通りにふるまえること。

ウ 誰ともコミュニケーションをとらずに、暇つぶしをいくらでもできるということ。

エ ママやパパがいなくなつて、好きなように思う存分のびのびと暮らすこと。

オ 自分の気持ちに嘘をつかず、思ったことを思ったように表現しても許されること。

問五 ——線④「今のおじいちゃまの方が、私はうんと好きだった」とありますが、なぜそのように思ったのですか。最も適當なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 一緒に住んで間近に見ることができた「おじいちゃま」の生活態度が素敵だと思ったから。

イ 「私」の知らないことを教えてくれた「おじいちゃま」の知識の深さを尊敬したから。

ウ 「おじいちゃま」が今まで隠^{かく}していたお茶目な一面を見せてくれたので、信頼^{うい}できると思ったから。

エ 「私」のことをかわいいとは思っていないと話してくれた「おじいちゃま」の素直さが感じられたから。

オ 素直に本音で話してくれた「おじいちゃま」の、あるがままの姿に親しみを感じたから。

問六 ——線⑤「係だと思いましたが、「係」になるとは、ここではどのようにすごすことですか。最も適當なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 係でない時と違い、孫をかわいい、おじいちゃんを素敵だと思ってすごすこと。

イ 「なんだってできる」ので、それぞれがなりたい自分の演技をしてすごすこと。

ウ 係でない時にはつき放題だった悪態を、係にいる間は我慢^{まん}してすごすこと。

エ 母から見た理想の娘や、娘から見た理想の父をそれぞれ演技してすごすこと。

オ 係でいる限り、本当の自分を隠し、悪い秘密を二人で共有してすごすこと。

問七 ——線⑥「絶対に言わない。ママのために」とありますが、なぜこのように思ったのですか。説明しなさい。

問八 ――線⑦「素敵ではないです。素敵ではない。でも私は大好きでした」とありますが、「おじいちゃま」は「ばあさん」のどのようなところが好きなのですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ばあさん」には、悪態をつくことで他の誰かを傷つける気がないことを理解していたので、その思いに応えようとして悪態の内容を誰にも漏らさなかった自分のことを評価してくれていたところ。

イ 「ばあさん」は疲れるほどみんなが望むことを全力でやっていたので、人に悪態をつくのは息抜きとして必要であり、その悪態は誰かを傷つけるものではない、思いやりにあふれた言い方だったところ。

ウ 「ばあさん」は自分が疲れるほど全力で人の望むことをするような思いやりを持っている一方で、かげで悪態をついていたが、そのような正直な姿を自分だけに見せてくれたところ。

エ 誰かを傷つけるような悪態をつくほど疲れることがあった「ばあさん」だったが、同時にエネルギーで、そうなるまで何に対しても正直に、全力で行う思いやりも持っていたところ。

オ 誰かに聞かれてしまったらその人を傷つけてしまう「ばあさん」の悪態を二人で共有して、その秘密を絶対漏らさないように「素敵な夫婦」を一緒に演じてくれたところ。

問九 ――線⑧「親子以上に素敵なものに見えた」とありますが、「おじいちゃま」と「ママ」のどのようなところを「私」は「素敵」だと感じているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手が演じている役割に応じて、お互いが自分の役割の意味を考えながら行動しているように見えるところ。

イ 優しい気持ちで自分の役割を演じることで、大好きな相手を傷つけまいとしながら接しているように見えるところ。

ウ 相手の希望や理想に応えようとして、自分の役割を理解して思いやりを持って接しているように見えるところ。

エ 与えられた役割を演じることで、お互いが親子として相手への理解を深めているように見えるところ。

オ ママが「親を慕う気持ち」を持つ子供を演じることで、お互いの関係を自然なものにしているように見えるところ。

問題三

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 二〇二四年十月一日からユウビン料金が値上げされた。
- ② この包丁は切れ味が悪くなってしまったから、トがなければならない。
- ③ いよいよ本番が近づいてくると、キモがすわってきたようだ。
- ④ 総選挙後、直ちにソカクを行わなくてはならない。
- ⑤ オウジヨウギワ悪く、彼女への想いを断ち切れない。
- ⑥ 子どもの健やかな成長が一番の願いだ。
- ⑦ 住所を書き損ねて、はがきを一枚むだにってしまった。
- ⑧ 彼女の日和見的な態度はあまりよろしくない。
- ⑨ 幕府による厳しい支配が、長期政権を可能にした。
- ⑩ 私たちの祖先の努力によって、この土地がひらかれた。

問題四

次の①～⑩の文の空欄に入るのに適当な語を後のア～シから選び、記号で答えなさい。

- ① 生活指導の先生は [] 顔つきだが、実は優しい。
- ② 計画を立てず [] 努力しても成果は得られない。
- ③ 相手の体当たりを受けて、 [] 背中を打った。
- ④ 誰にも話すことができず、 [] 思いに沈む。
- ⑤ [] 数の虫に追いかけられている。
- ⑥ あと少しのところで優勝をのがして [] 。
- ⑦ 発掘作業を見学し、歴史の一端を [] 。
- ⑧ 彼女はほめられて思わず [] 。
- ⑨ 信頼できる人だけに本音を [] 。
- ⑩ 話し合いの結果、最終的な判断を人に [] ことになった。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|---------|---|-------|---|-------|---|-------|
| ア | はにかむ | イ | おびただし | ウ | ほのめかす | エ | やみくもに | オ | やるせない |
| カ | ゆだねる | キ | ためらう | ク | かいまみる | ケ | したたかに | コ | うなだれる |
| サ | いかめしい | シ | いやおうなしに | | | | | | |

問題五

次の文章の ① ～ ⑩ に入れるのに適当な四字熟語を後のア～スから選び、記号で答えなさい。

ある日、私たちの学校でサッカー大会が開かれた。私たちは ① 練習し、一ヶ月前に大敗したチームを倒すために、全員が一丸となつて準備してきた。

試合が始まると、やはり相手チームが強く、私たちは ② しながらも必死に戦った。当初失点が続いて得点できず、私は心が折れそうになったが、みんなが ③ に「まだまだ追いつけるぞ！」と励まし合いながら、取られても取り返そうと、④ の精神で頑張り続けた。キャプテンのタケルが「もうちょつと状況に合わせて、⑤ に動こう！」と皆を励まし、私たちは相手に合わせて戦術を変えながらプレーを続けた。

試合が進む中、私たちも得点して ⑥ の接戦となり、最後まで緊張した状態が続いた。でも、これまで練習を積み重ねてきたチームの仲間達とは気持ちが通じ合つて ⑦ で連携できたからこそ、最後に見事なゴールを決めることができたのだと思う。

試合終了後、私たちは苦しんだ末に得た勝利の喜びでいっぱいになり、⑧ だった。先生も「きみたちの成長速度は ⑨ だね！」と褒めてくれて、とても嬉しかった。

試合からの帰途、私はその日一日を振り返り、積み重ねた努力の大切さを実感して、これからも失敗を恐れず、不平不満を口にするこなく、⑩ で努力を続けようと決意した。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | 異口同音 | イ | 悪戦苦闘 | ウ | 大言壮語 | エ | 感慨無量 | オ | 有名無実 |
| カ | 七転八起 | キ | 以心伝心 | ク | 臨機応変 | ケ | 日進月歩 | コ | 不言実行 |
| サ | 本末転倒 | シ | 五分五分 | ス | 一生懸命 | | | | |

(以下余白)